新進芸術家海外研修制度
研修結果報告書

研修開始年度｜令和４（2022）年度

分　　野｜音楽（クラシック ピアノ演奏）

研　修　先｜ドイツ（ワイマール）

研 修 期 間｜1年

氏　　名｜王　德稔

１．研修目的（課題）

将来、日本の音楽界において演奏や教育を通して様々な貢献ができるよう、ワイマール音楽大学でピアノ演奏や広く音楽の学習、研究を行なうことを目的とする。同大学で十年来固い信頼関係にあるグルツマン教授に師事し、また様々な文化背景を持つ優秀な音楽家と交流し切磋琢磨しながら、音楽的真実と感動を表現するピアニストとなることを目指して日々研鑽を積む。そこで得た知見を日本でのクラシック音楽の普及に役立てたい。また、様々な国際コンクー　ルへの参加とドイツ国家演奏家資格の取得のために入念な準備を行うこと、そして様々な優れた音楽家の講習会に参加し、音楽的視野と人脈を拡げることをキャリアアップの観点からも積極的に行う。　ワイマールは、ゲーテやシラーといった文人、バッハやリストといった音楽家達が活躍した古典主義の都であり、深い文化の歴史が醸し出す雰囲気はとても良い刺激を与えてくれる。また、ワイマールは喧騒が無く閑静で、移動に割かれる時間や労力もほとんど無い比較的小さい都市であるため、勉学に集中して打ち込める。ワイマール音楽大学では、クラシック音楽の伝統を重んじる土壌と、多種多様な国の音楽家が自由に交流しあい、切磋琢磨するオープンな環境がある。将来、留学生活で得た知識や経験を日本の音楽界において後進の指導に役立てる為、グルツマン教授からロシアのピアニズム、滞在都市ワイマールからドイツの文化を存分に吸収し、音楽家、文化人として成長する。

２．研修日程

研修先　：ワイマール フランツ・リスト音楽大学

所在地　：ドイツ（ワイマール）

指導者　：グリゴリー・グルツマン教授

研修期間：令和 4(2022)年 10 月 1 日～令和 5(2023)年 9 月 15 日

３．研修内容、成果

Ａ）研修課題の題目

【課題①】ロシア流ピアノ演奏法の理解を深める

【研修内容・方法①】

師事しているグリゴリー・グルツマン教授は、ロシア　サンクト・ペテルブルグ出身のネイガウス系統のロシア・ピアニズムの流れを汲むピアニストで、レッスンでは、音一つ一つに表情を持たせる演奏技術、原理的に打楽器であるピアノを歌わせる奏法、さらには芸術家としての独自性を表現するロシア的アプローチと併せ、形式、演奏伝統、作曲家の意思を尊重するドイツ的アプローチも行われ、私の演奏表現を、さらに色彩豊かに成長させると同時に、常に形式に留意し音楽を構築していく力も養ってくださる。毎回のレッスンに、幅広いレパートリーを入念に準備して臨み、多くを吸収する。

【課題②】室内楽の演奏法についての理解を深める

【研修内容・方法②】

ソロの演奏の勉強だけでなく、室内楽についても、同大学院で副科として選択しており、著名なロシア出身のチェリストであるアレクセイ・スタッドラー氏に師事している。氏は、多種多様な室内楽演奏の経験があり、素晴らしい知見を持っている。レッスンを通して様々な楽器構成の音楽の演奏法について理解を深めつつ、多くの異なる音楽家と演奏することによって刺激を得る。

【課題③】大学院過程を修了し、国家演奏家資格取得プログラムへ進学する

【研修内容・方法③】

音楽の勉強の中で重要なマイルストーンとなる、大学院卒業試験を受け、在籍しているワイマール音楽大学の大学院課程を修了する。同大学院の卒業試験は、80 分の口頭曲目解説付きのソロ・リサイタル、20分以上の室内楽曲の演奏と20,000字のドイツ語論文の執筆が必要である。また、大学院過程終了後、音楽家として取得できる最高学位であるドイツ国家演奏家資格(Konzertexamen)の取得プログラムへの進学のため、同大学で入学試験を受ける。

【課題④】国際コンクールへ参加する

【研修内容・方法④】

音楽家としての更なるキャリアアップのため、様々な国際コンクールへの参加へ向けてレパートリーの拡大と掘り下げた練習を行い、準備を万全にする。コンクールではベストを尽くして演奏すると同時に、審査員との意見交換を通して、音楽的視野と人脈を拡げる。

Ｂ）研修の成果

【課題①】ロシア流ピアノ演奏法の理解を深める

<u>大幅に達成できた</u>

グルツマン教授とのレッスンでは、バロックから近代までの幅広いレパートリーを勉強し、それぞれのスタイルに合った音楽の解釈と、その表現を可能にする演奏技術を叩き込まれた。

バッハでは、平均律クラヴィール曲集から学び、アーティキュレーションの重要性、多くの声部をそれぞれ聴こえるようにするために音価の長い音を豊かに響かせ、他声部のアーティキュレーションを特に明確にすること、また、チェンバロのレジスターの変化をウナ・コルダを用いて表現することを教えられた。

形式美の極致とも言えるモーツァルトでは、ピアノ・ソナタ第 14 番ハ短調 K.457 を学び、厳格なテンポとリズムを要求され、その上でオペラの歌手のようにメロディーを鍵盤上で歌う技術を磨いた。

教授が得意とするベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品 101 も勉強し、教授の素晴らしい解釈を教えていただいた。第一楽章は、告解にも似た内に秘めた感情の吐露であり、その幽玄たる情感を表現するために、静かな中に、全ての音に少しずつ違った色彩を持たせることを厳しく教えられた。第二楽章で

は、リズムの躍動感と厳格さ、そして喜びに満ちた表現が要求された。第三楽章は、当時の病に冒されたベートーヴェンの痛みと苦悩に満ちた音楽であり、不安定な調性が続く部分は鎮痛剤服用後の朦朧とした感覚、そしてその効能が切れた後に再び現れる痛みを表現している。それぞれの和音に合った手のポジションを吟味し、それぞれに情感を込めて弾くことを要求された。第四楽章は、絶望からの理性による復活であり、喜びに満ちながら、暴走しない堅実なテンポで演奏することを教えられた。その他、ピアノ・ソナタ作品 53「ワルトシュタイン」もレッスンしていただき、交響曲のような音色と形式の解釈の方法を学んだ。

シューベルトでは、即興曲第 1 番ハ短調をレッスンしてもらい、ベートーヴェンに近いが少しロマン派に寄った表現を学んだ。

ショパンでは、幻想曲　作品 49、舟唄　作品 60 を勉強し、男性的で気高いが、決して粗野にならない強音の表現方法を教えられた。また、一見すると名人芸的に思えるパッサージも一音一音歌うことが要求された。

シューマンの交響的練習曲　作品 13 では、それぞれの変奏での性格を、シューマンの移ろいやすい性格になぞらえ、強調して表現することを教えられた。

リストの超絶技巧練習曲「荒野の狩」では、名人芸的パッサージの明瞭性、リズムの厳格な表現について厳しく指導された。超絶技巧練習曲「夕べの調べ」では、自由な曲想の中でも拍が理解できるように演奏することを学んだ。

ラフマニノフのピアノ・ソナタ第 2 番では、ホロヴィッツの名演に触発されたダイナミズムに富んだ解釈をレッスンしていただいた。爆発的な表現が必要な箇所と叙情的に歌い上げる箇所のコントラストと、それらを通して集中力を持続させ、一つの物語として演奏することを学んだ。また、難曲として知られるピアノ協奏曲第 3 番では、上記のコントラストと持続性に加えて、オーケストラと息を合わせるための拍の取り方、オーケストラに負けない音の豊かさを作り出す方法を学んだ。

また、一時期腰の故障で 2 週間大学でのレッスンを休まざるをえなくなったグルツマン教授を代理して、教授担当クラスの生徒に対して教授アシスタントの立場でレッスンを行うことを許可され、生徒に助言と指導を行った。生徒個々人の個性や意図を尊重しつつ、自分の知見を必要なだけ、且つ効果的に伝えることを目指し、好意的な反応を得た。レッスンを行うことで、教育上の技法を得る大変貴重な経験をしたと共に、自分が教わってきたピアニズムの理解がさらに深まった。

ベルリン在住のピアニスト、原田英代氏に出会う機会に恵まれ、モスクワで教えた高名なフェインベルク系統のピアニズムを継承する氏にコンクール前に集中的にレッスンしていただき、また別の視点からロシア流ピアノ奏法について学ぶことができた。ロシアに伝わる、体を無駄なく使って響きの豊かな音を創り出す重量奏法について、具体的な知見を得ることができた。また、フレーズ同士の句読点や接続詞などを解釈し、どのように楽譜から作曲者の意図を汲み取るのか、その理念を教えていただいた。グルツマン教授に、幅広いレパートリーを学び、それぞれの作曲家の特性を掴んで表現するロシア流の技術と解釈を、長いクラシック音楽の時代の流れに当てはめて教えていただいた。そして、原田英代氏

に、一つ一つの楽曲を考察し、深く掘り下げる解釈とそれに見合った音を生み出すための重量奏法を学んだ。素晴らしいピアニストを生み出し続けてきたロシア・ピアニズムの演奏法についての理解がこの一年で深まったと考える。これからも、より良い演奏を目指して精進していきたい。

【課題②】室内楽の演奏法についての理解を深める

達成できた

室内楽では、フランクのヴァイオリン・ソナタ、メンデルスゾーンのチェロ・ソナタ第２番、フォーレのピアノ四重奏曲第１番とピアノ五重奏曲第１番、シューベルトの四手のための幻想曲を学んだ。

フランクは、ヴァイオリンの名教師、ルーシー・ロバート氏のマスタークラスで演奏する機会に恵まれ、氏のフランスの伝統を汲むヴァイオリンの響きと感情表現の技法に大いに刺激を受けた。

メンデルスゾーンは、音数の多いピアノパートがチェロパートを邪魔しないように、透明に演奏することをスタッドラー氏に教えられ、室内楽の音のバランスについて理解が深まった。

フォーレのピアノ四重奏曲第１番は、フォーレの初期を代表する傑作であり、ピアノ五重奏曲第１番は後期の演奏機会の少ない知られざる名曲である。両曲を通して、フォーレの作風の変化を学ぶことができた。両曲共に、ピアノの和声が重要な役割を担っており、これを共演者に分かるように表情づけて演奏することを通して、室内楽におけるピアノの和声の表現方法について勉強できた。また、それぞれ別の共演者と演奏し、それぞれの音楽家の違った感性に合わせて演奏することを通して、その場のメンバーの雰囲気やバランスにブレンドインすることを学ぶことができた。

シューベルトの幻想曲は、ロシア伝統を汲むミハイル・リフィッツ教授よりレッスンを受け、また違った視点からピアノで歌う技法についての知見を得ることができた。第２パートを受け持ち、4 手演奏での音のバランスの取り方とペダリングの方法について学ぶことができた。

また、友人であるロシア人ソプラノ歌手と共にラフマニノフの歌曲５曲を学び、歌曲伴奏科教授であるトーマス・シュタインホーフェル教授にレッスンをしていただいた。歌曲の伴奏の経験を深められたと同時に、ラフマニノフの長い旋律線についてピアノでそう表現するかについてのインスピレーションを得、ソロの楽曲の解釈に役立てることができた。

一年間、様々な室内楽を演奏することで、重要となるバランスと和声の感覚をより洗練させることができた。多くの音楽家との共演、意見交換は大いに良い刺激となり、音楽的視野を拡げることができた。ソロの勉強に忙しく、さらに多くの室内楽を手掛けたかったが、時間が足りなかった。

【課題③】大学院過程を修了し、国家演奏家資格取得プログラムへ進学する

大幅に達成できた

大学院卒業試験では、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ 第 21 番 作品 53「ワルトシュタイン」、シューマンの交響的練習曲 作品 13、ショパンの幻想曲 作品 49、ラフマニノフのピアノ・ソナタ 第２番 作

品 36 をプログラムとして、ドイツ語での口頭解説と共に演奏し、最優秀成績である 1,0 を得て合格した。また、シューマンの交響的練習曲の作曲背景と楽曲分析をテーマに論文を執筆し、こちらも優秀な成績を得ることができた。

室内楽の試験では、フォーレのピアノ五重奏曲第１番を演奏し、こちらも最優秀成績である 1,0 を得て合格した。

国家演奏家資格(Konzertexamen)の取得プログラムへの入学試験も、志願者約 30 人中 2 人のみの合格者の狭き門をくぐり、無事合格することができた。

【課題④】国際コンクールへ参加する

大幅に達成できた

グルツマン教授と原田英代氏のレッスンの助けを得て練習、準備を進め、2023 年 1 月にザグレブで行われた第 7 回スヴェティスラフ・スタンチッチ国際ピアノコンクールにて優勝、及びベートーヴェン ソナタ賞と協奏曲賞の２つの副賞をいただいた。本選の協奏曲の前に 2 回オーケストラとリハーサルする機会に恵まれ、今後の管弦楽との合奏の指針となる有意義な経験となった。また、協奏曲賞の受賞者としてザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団と共演することが決定した。 協奏曲賞として、来シーズンにザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団と共演することが決まった。

また、同年 2 月に行われた第 5 回高松国際ピアノコンクールでは、セミファイナルである第 3 次予選まで進むことができた。セミファイナルではフォーレのピアノ四重奏曲第 1 番を素晴らしい音楽家と共演することができ、貴重な経験となった。

審査して頂いた著名な音楽家たちともコネクションを築くことができたので、今後の音楽活動に役立てたい。

Ｃ）研修成果の活用計画

今後は、ワイマール音楽大学 国家演奏家資格(Konzertexamen)の取得プログラムの学生として現地に留まり、二年間、日本のクラシック音楽界に役立つ人材となることを目指し更なる研鑽を積んでいく。この一年間で得られたロシア・ピアニズムの知見を使い、多くのレパートリーを手掛けていき、コンサート活動に繋げていく。

また、将来的に日本でロシア・ピアニズムを広めるために、得られた知識を教える教授活動も行っていく。現在、同音楽大学の副科ピアノの臨時講師として勤務しており、奏法を教える良い経験となっている。これからも、良い教師となれるよう経験を積んでいきたい。

室内楽については、引き続き、他の音楽家と音楽を通じて交流する貴重な機会として、積極的に取り組み、特にあまり知られていないフォーレの素晴らしい室内楽曲を取り上げていく。

今回の研修中に得ることができた、国際コンクールでの受賞歴と経験を活かして、さらなるキャリアアップのために他の国際コンクールにも挑戦していく。

Ｄ）研修国の情報

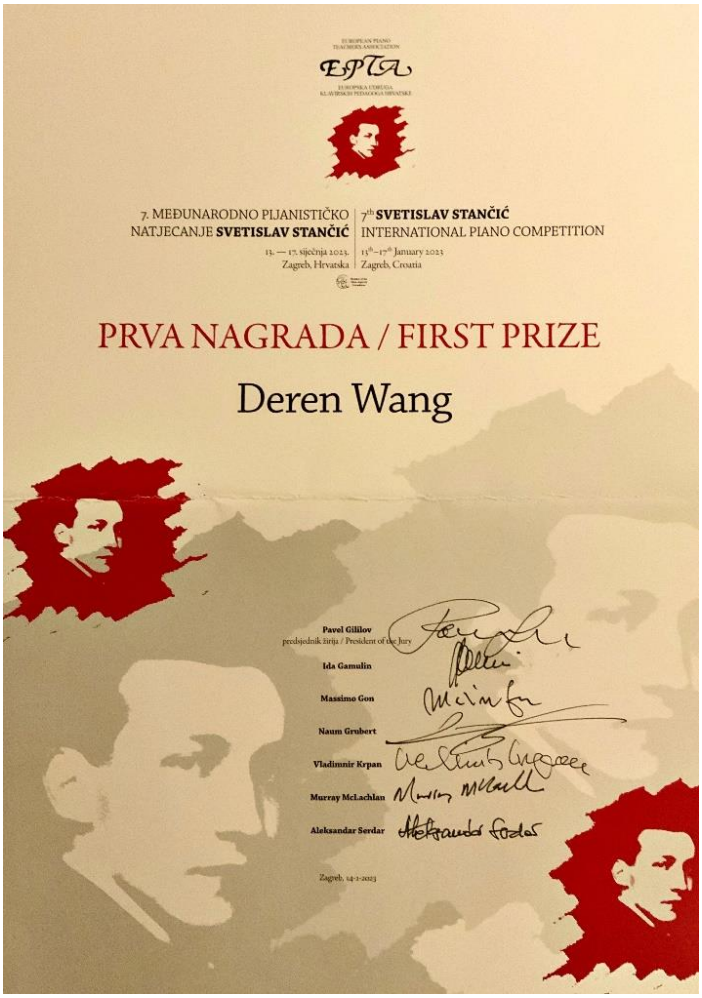
ドイツには、各主要都市に一つずつ国公立音楽大学があり、その数は２４校に及ぶ。その教育レベルの高さから、世界中から優秀な音楽家が集い、切磋琢磨しながら研鑽を積んでいる。国公立音楽大学の多くは、学費が公費によって賄われているために、非常に勉強に適した環境である（ワイマール音楽大学では半学期およそ 200 ユーロ）。

また、クラシック音楽は、バッハやベートーヴェンを輩出したドイツ人の文化的生活の一部であり、コンサートへ赴くことはごく一般に行われるため、コンサート活動をすることが困難ではない。自分も多くの親切なコンサート主催者との出会いに恵まれ、コンサート活動を行ってきた。また、ベルリンフィル、ゲヴァントハウス、ミュンヘンフィルなど有名なオーケストラが数多くあり、世界最高水準の演奏を聴くことができ、多くの良い刺激が期待できる。

コロナによる演奏会や、コンクール、フェスティバルなどの規制は 2023 年 11 月現在完全に撤廃されおり、以前の活気を取り戻している。

ワイマール フランツ・リスト音楽大学 本校舎

同音楽大学のグルツマン教授のレッスン部屋



スタンチッチ国際ピアノコンクール 第一位 賞状